

2022年5月15日 説教『まことのぶどうの木』

高橋克樹牧師

聖書 出エジプト記19章1〜6節、ヨハネ福音書15章1〜11節

ヨハネ福音書15章冒頭の言葉である『わたしはまことのぶどうの木、わたしの父は農夫である』は、有名な聖句である『わたしが命のパンである』（6章34節）と同じくギリシア語のエゴ・エイミイが用いられています。意味は『わたしこそが命のパンである』と、イエス自身のこと強調されているのですが、6章34節はエゴ・エイミイが最初に用いられた個所であり、この15章1節はその最後の用例です。

15章1節から始まる「イエスはまことのぶどうの木」の個所は、「わたしこそが…である」（エゴ・エイミイ）定式の最後の締めくりの個所です。エゴ・エイミイの定式が象徴していることは、イエス・キリストとそれに従うキリスト者たちの関係のことを指し示している点です。イエスがぶどうの木であり、それにつながるキリスト者が枝であるというように、イエスの本質を「ぶどうの木」という言葉で表し、それにつながることでキリスト者がどのような自己理解をもって生きていくかが問われているのです。

「わたしこそがまことのぶどうの木である」とイエスが言うとき、この言葉を聞いた者はぶどうの木の枝に実る自分たちぶどうの房の事を連想したはずです。たとえば、エレミヤ書2章21節『わたしはあなたを、甘いぶどうを実らせる確かな種として植えたのに、どうして、わたしに背いて、悪い野ぶどうに変わり果てたのか』とあるのですが、それはイスラエルの民が神の期待に反して、悪しき実を結ぶ野ぶどうとなってしまうことを嘆いている個所です。それはイスラエルの民であることが自動的に神の救いにあずかる条件を満たすことにはならなくなったことを示しています。そこで神は「まことのぶどうの木である」イエスを遣わされたのでした。この唯一の命の源であるイエスにつながって実を結ぶならば、救いにあずかることになるということが、ここで強調されているのです。

2〜3節では、神に背信した経緯から、豊かな実を結ぶために神がぶどうの枝の剪定をするということです。2節で、イエスにつながっていないながら実を結ばない枝は神が取り除くと言っています。しかし一方で、神は豊かな実を結ぶように手入れをなさると言います。この「手入れをする」（カサイロ

し) という語は、いわゆる剪定を行うことです。実を結ぶようにするために神は剪定を行うのです。たとえば盆栽は徹底的に剪定され、その木の生命が危機に直面するほどに刈り取られる時期(飢餓状況)をわざわざ与えることで良い盆栽になるといいます。

ぶどうの木も剪定は結実期の終わりごろに行われ、冬は幹とごく少数の枝に刈り込みます。このように徹底的に刈り込むことで生命の息吹を内部の貯え、良い実を結ぶ準備が整うのです。3節の『わたしの話した言葉によって、あなたがたは既に清くなっている』という言葉も「手入れをする」と関連しています。イエスの言葉を聞いている者は清いというのですが、この「清い」(カサロス)は剪定を意味するカサイローの形容詞形で、剪定後の状態を「清い」と言っているのです。そういう剪定の御業が苦難という形で人生に訪れるのです。そのことでイエスにつながって生きる者にされるというのです。4節で『わたしにつながっていないさい』という表現は、イエスに「とどまっていなさい」というニュアンスが強い言葉です。イエス・キリストはぶどうの木として、その枝として連なるキリスト者たちとの関係を取りむすび、その一人ひとりを枝としてご自身に結び付けていくくださる。そのイエス・キリストとの人格的な絆がキリスト者をして「愛において成熟」させていくのです。

まことのぶどうの木につながることで実を結ぶということが、イエス・キリストとの人格的な絆として語られてきたのですが、9〜10節ではそれが「愛」という新しい視点が与えられることで、キリスト者の生き方へと主題が方向転換していきます。イエスにつながっていることが、神の愛を受け、その愛にとどまり、今度は愛を与える者へと実存的な転換をとげていくというのです。そのことが9節の『父がわたしを愛されたように、わたしもあなたがたを愛してきた。わたしの愛にとどまりなさい』という言葉に集約されていくのです。実はここで『とどまる』(メノー)と訳されていますが、この語は1節以下で何度もでてきた『つながる』(メノー)と原語では同じギリシヤ語です。

こうして12節以下で『わたしがあなたがたを愛したように、互いに愛し合いなさい』という新しい掟が示されます。さて、「互いに愛し合いなさい」という命令で私たちが思い出すのは、善きサマリヤ人の譬えです。ルカ福音書10章25〜37節にあります。この隣人愛の譬えは「永遠の命」を得るためにはどういう行いをしたらいいのかという問いに対するものとしてイエスによって語られました。イエスによって問われたのは律法学者です。この律法学者は、モーセ律法に従って、神を愛

すること、隣人を愛することが律法の教えですと正しい答えをします。同じルカ福音書18章に登場するお金持ちの議員は、永遠の命を得るためにはすべてを捨ててイエスに従って来なさいと言われたのですが、従うことができませんでした。つまり、イエスにとどまり続けることができずに、寂しくイエスから離れ去っていったのです。

神から愛されていることを真実に知り、そのことを信じる者が神に愛される者とされ、そして神の愛に応えて、隣人を真実に愛する者とされていくのです。ここでのキーワードは「愛にとどまる」とです。そしてそのことを可能にするのは「異質なものとのお出会い」を大切にすることです。その事例として、イエスは善きサマリア人の譬えを話されたのです。

ある人が追いはぎに襲われた。半殺しにされたその人は道端で死んだように横たわっている。そこをたまたま祭司が通りかかったが、その人を見ると、道の向こう側を通って見捨てて立ち去ったわけです。同じようにレビ人も、道の向こう側を通り過ぎて、見捨てたわけです。

祭司とレビ人はユダヤ人ですが、半殺しにあつた人もおそらくユダヤ人です。それに対して通りかかったサマリア人はその人を見て憐れに思い、歩み寄って傷口に油とぶどう酒を注ぎ、包帯をして、自分のロバに乗せ、宿屋に連れて行って介抱したのです。宿泊と治療のお金も差し出しました。イエスがこの3人の中で、その瀕死の人の隣人になったのは誰かと問うたとき、この律法学者は「その人を助けた人です」と答えたのでした。おそらくイエスは律法学者の答えに驚いたと思います。なぜなら、イエスが想定していた答えは、ユダヤ人である律法学者にとっての隣人とは、律法を遵守する「祭司、レビ人」だと答えることでした。だから、この律法学者の答えに驚いたと思います。なぜなら、その人は「服をはぎ取られ、半殺しになっていた」からです。もし、この半殺しになった人が同胞のユダヤ人であつたら、とりわけ律法遵守のユダヤ教徒であつたら、彼に助けの手を差し伸べなければ祭司の責任性が問われることになります。しかし、この人は一糸まとわぬ裸で、しかも話すこともできない瀕死の状態です。ヘブライ語を話せる律法学者ならば、躊躇なく助けたはずですが、ユダヤ人の農民ならアラム語を話したはずですから、助けたでしょう。アラビア語やシリア語を話す異邦人なら、助けることを躊躇したはずですが、話すことができれば、言語からその人が何人であるかが分かったはずだからです。けれども、この人は瀕死の状態です。もし死んでいたら、その人に触れる祭司は穢

れをこうむり、儀礼を執行する資格を失います。エルサレムで一週間もかかる儀礼的清めを受けなければなりません。一方、サマリア人が瀕死の意識不明の重傷で、もしかしたら死んでいるかもしれないこの人を見て近寄って、生きていることを確認したうえで傷口を治療し、宿屋に担ぎ込んで介抱したこともまた、実はありえないことでした。当時ユダヤ人にとってサマリア人は異邦人よりも敵対的な関係にありました。ユダヤ教を捻じ曲げたサマリア宗教を崇拜している者たちとして、特にユダヤ人には物凄く嫌悪されていました。

そのことは、サマリア人もよくよく承知していることです。ですから、サマリア人が負傷したこの人をユダヤ領内の宿屋に運び入れることは、自分の命を危険にさらすことを意味しました。表現ははなはだ時代劇風ですが、たとえば1850年代にアメリカ南部で、アメリカ原住民が瀕死のカウボーイを自分の馬に乗せて、宿場町に入ったとしたら、人々はそのアメリカ原住民をただではおかないはずです。ですから、イエスの「だれがその人の隣人になったか」の問いかけに、その律法学者が「サマリア人です」と答えたことに、一番驚いたのはイエス御自身だったはずですが、しかし、この驚きは律法学者に分け隔てのない隣人との関わりを勧める言葉として、『あなたも同じようにしなさい』という言葉になったのです。

さて、イエスが隣人愛を語る際の根拠としたのは、レビ記19章18節の『あなたはあなた自身のように、あなたの隣人（レア）を愛しなさい』です。ここでの隣人はヘブル語でレアと発音しますが、隣人だけでなく友人をも意味する語です。ステーキの焼き加減を注文するときのレア、ミディアムの連想で覚えてください。ですから、「あなたの友人を愛しなさい」と訳すこともできるために、隣人への愛はその後ユダヤ教の中で同胞愛に限定されていくのです。そして、同胞愛が強くなればなるほど、同胞に敵対する「敵への憎悪」が増し加わります。当時のサマリア人がその対象だったのです。戦時中の日本の愛国心もそれと同じです。それに対して、敵に対する憎しみに裏打ちされた隣人愛を打破し、逆転させたのがイエスの隣人愛の教えなのです。サマリア人はユダヤ人にとっては敵でした。隣人愛を同胞愛の視点から強調すればするほどサマリア人を憎まなければならないのです。それを逆転させたのがイエスなのです。

私たちはどの世にして他者に対する愛（友情や隣人愛）を持つに至るのでしょうか。友情というの

は、親や兄弟などによって与えられる愛とは別の、他者に対する愛情です。では、どうして他者に愛情を持つことができるのか？ その出発点は他者と出会うことです。それがなければ、隣人愛は生まれてきません。それは次のように言うことができます。私たちは一人で生きていくようであっても、実は一人で生きていくわけではありません。実際、自分の中に多くの人が生きていくことを認めざるを得ません。自分の中に親や子ども、連れ合いが生きています。恩師である先生も、遊んだ仲間も、小説の登場人物も自分の中で生きて、自分の生き方を形づくっているのです。大勢の人が自分の中に生きていて、自分という人格を形成しているのです。同じように他人の中にも自分が生きていくのです。人格の相互浸透があつて、自分という存在はできあがっています。そして、その出会いは、他者の痛みを自分の痛みのように感じるができる出会いがあつて初めて生まれてくるものなのです。

その意味で神が「人が独りでいるのは良くない」と言った言葉の意味は非常に深い。他者の思いや悲しみ、痛みを理解できる能力を、神は創造の際に人に与えているのです。神はどのように人を創造されたのです。しかし、現代社会は個人の個別的な達成能力でしか人を評価しません。その人が何をできて、今何ができるかでしか評価しない。それではイエスの命令である「互いに愛し合う」ことはできません。そういう他者との関わりにおいて生まれてくる愛を許さないのが今の多くの人を支配している時代精神です。

エリザベス・サンダーホームの話を知ることがあります。現在はDVや虐待を受けた子どもを数多く預かっています。そこで実母から暴力を受けていた幼い子が「先生、お母ちゃんのためにお祈りをしてほしい」と頼んできたというのです。幼い子が実母から暴力を受けながらも、直感的に我が子を受け入れられない母の辛い思いを感じ取っているのです。このような幼い子にも他者の思いを感じ取る能力が与えられているのです。他者の思いを自分の思いにできる存在として神は私たちを創造されたのです。

イエスの互いに愛し合いなさいという言葉は命令として与えられているように一見みえますが、その隣人愛を行う自分の主体性ばかりを考えていると、実行できない自分に失望するだけです。自分の中に物事を見るのではなく、まず、神が出会わせてくれる人や出来事、苦難や課題があつて、それら自分を形づくる出会いが恵みであるという思いから出発してみることが求められているのではないのでしょうか。その中心にイエスがおられるのです。